



1選手とコミュニケーションをはかる山田さん 2山田さんを「阿南の父」と慕う神谷選手 3緑に囲まれたスタジアムは「森の中の球場」とも呼ばれている



キーパー歴3年  
稲田 定信 さん  
(65歳・阿瀬比町)

キーパー歴7年  
山田 定和 さん  
(62歳・山口町)

山田さんは、野球場がオープンした平成19年7月に嘱託職員としてグラウンドの管理を担当。以来、阪神甲子園球場をはじめ名だたる球場に足を運んで、その仕事の流儀を学んできた。自身50年に及ぶ野球人生で得た知識と経験を生かし、選手目線でグラウンド整備に心血を注いでいる。稲田さんもまた根っからの野球好き。30歳から野球を始め、今も現役続行中。キーパー歴は3年と浅いものの、寸暇を惜しんで仕事に精を出す姿は、盟友の山田さんも舌を巻く。「利用者のために美しく」がモットー。県南を代表する立派な野球場を守っていききたい、と熱い思いを傾注している。

**選手の厚い信頼を受けて**  
四国アイランドリーグプラスの後期リーグが大詰めを迎えていた昨年9月12日、JAアグリあなんスタジアムで、優勝マジックを3とした徳島インディゴソックスと香川オリブガイナイズとの試合が行われた。午後4時すぎ、グラウンドで練習が始まると球場が動き出す。バックネット裏の広場ではオフイシヤルグッズが販売され、放送室では電光掲示板の入力作業が進められていた。グラウンドに目をやると、グラウンドキーパーの山田さんが、インディゴソックスの選手たちと親しそうに会話している。

「調子はどうや。今日勝ったら明日にも胸上げやな」  
好調を維持する選手たちの表情は皆明るく、優勝への気負いは感じられない。山田さんと家族ぐるみの付き合いがあるという神谷厚毅選手（27歳・愛知県出身）に、このグラウンドの印象について尋ねてみた。  
「いつもきれいに管理されていて、気持ちよくプレーをすることができま。投手陣の間では、県内で一番投げやすいマウンドだと好評です。これほど熱心なキーパーさんは、リーグ関係者の中にはいませんよ」  
思わず照れ笑いする山田さん。選手からの信頼は厚いようだ。

仕事人

# 思いにふれて

～密着365日～

「華やかな舞台を整える」

## グラウンドキーパーの



そこに一歩足を踏み入れた瞬間、不思議なほどの胸の高鳴りを覚えたことはないだろうか。鏡のように均された土、絨毯のように緑鮮やかな芝、職人が精魂傾けたホンモノの美しさがある。野球ファンであるなしを超えて人を惹きつける「魅力」を生み出すグラウンドキーパーの、情熱と飽くなき探求心を追いかけた。



8

1水をまくことで土の色がきつね色から黒色へと変わり、ボールが見やすくなる2民間の気象情報サービスを利用して天気予報をこまめにチェック3芝生にはスプリンクラーで水をまく4業務日誌に作業内容等を細かく記録している5バギーで内野の土を均していく6土の高低を見極める鋭いまなざし7ローラーで土を転圧するようす8パイプロレイキで土をほくしていく9霜が降りると土中の水分が膨張し、表面に凹凸ができてしまう



9



5



6



7



2



3



4



1

## 寝ても覚めてもグラウンドのよっぱかり

グラウンド整備は、主に山田さんと穂田さんの2人が行っている。基本は、公認野球規則に謳われたグラウンドの寸法や勾配などを忠実に実践すること。選手にけがをさせないことはもちろん、快適にプレーができるよう、土の固さや芝生の長さをこまめに管理している。グラウンドキーパーに求められるのは「手と足の感覚」。はた目には簡単そうに見えるトンボかけも奥が深く、いざ手にしてみると満足に操れるものではない。土の中で「適切な硬さ」に調整するのは足の裏の感覚のみで行う。散水と同じことだ。地表を水の勢いで傷めることなく、霧のようにやさしく均等にまくにはどのような方法があるのか。時間をかけ、身につけなければできないことばかりだ。

グラウンドの管理は、季節によって内容も回数も異なる。芝生が活性する6月以降は、週2、3回の芝刈りや水やりに加え、雑草やサッチ（芝生の成長とともに下部が枯れてできるカス）の除去といった作業も頻繁に行わなければならない。一方、冬場は芝生を養生させるため、砂を入れ替えてじっくりと力を蓄えさせる。内野の土も、黒土と砂の割合を変えている。太陽の照り返しが強い夏場は、黒土を多めに配合

## ほぐして、均して、固める鏡のような美しさに魅了される土

J Aアグリあなんスタジアムでは、年間約450試合が行われている。合宿などを含めると、延べ1万数千人が踏みしめていることになる。言い換えれば酷使されているグラウンドといえる。踏みしめられて傷んだ土のグラウンドは表面が荒れるだけでなく、地中で固まりコンクリートのような層が出来てしまい、水はけが悪くなる。そのため、年に一度、土をほぐして水はけをよくしてやる必要があるのだ。

シーズンオフの1月、土をほぐして一から内野を作り直す大掛かりな作業が行われる。15センチの厚みで敷均された黒土をパイプロレイキと呼ばれる機械でほぐし、プレーや風雨で削られた土を元通りに均していく。整形が終わるとローラーで転圧し、散水して固める。こうした作業を1カ月繰り返すことで、弾力性のあるグラウンドに仕上がりが、水はけがよくイレギュラーの少ない状態が保たれる。1年間のグラウンドコンディションを左右する大事な作業なのだ。「土も芝も生き物やから、大事に育ててやらんとあかん」バギーを操る山田さんの表情はいつも以上に真剣だった。「運転していると、どこが高くどこが低いかが分かる」迷うことなく土を均していく。



週に2日は、シルバー会員と一緒にグラウンド整備を行っている

して、ボールを見やすくしている。冬場は霜の影響を受けるため、凍結防止剤をまいて土質の安定化を図っている。1年を通じて綿密な計画のもとにグラウンド整備をしているが、自然が相手の仕事であるため、相対的にその折り合いは難しい。天気との付き合いは日常的で、試合中に雨が降れば気配りも数倍になる。

「恵みの雨もあれば、そうでない雨もあります。大雨が降れば、休日でもグラウンドに出て来て、異常がないかを確認しています。気が休まることはありません」と山田さん。寝ても覚めてもグラウンドのことばかり。グラウンドを守る人。それがグラウンドキーパーなのだ。

どれくらい転圧されたのですか？  
「ほうやなあ、20回くらいかな」  
そろそろ完成ですか？  
「いや、まだまだ」

漆塗りに似た作業は、月も後半になる頃には表面も鏡のような均一さで仕上がっていた。土の上を1歩、2歩と踵から足を踏み下ろすと、作業前とは明らかに違う心地よい柔らかさを感じられた。水はけの良さや弾力性を兼ね備えたグラウンドは、こうした入念な「土壌づくり」によって保たれているのだ。



やり残したことはないか。ただ、静かな時間が流れていく。

「グラウンド状態を一番確実に保つのは使わないことです。でもそういうわけにいきませんから。明日使ってくれる人のためにできるだけのおきをおきたい。」  
「いつ来てもきれいな球場やな」  
「ってわくわくするような感動が、

**使ってもらう人のために  
美しく、そして快適に**  
勝てば後期優勝に王手がかかる一番、スタンドの熱気は最高潮に達していた。いよいよプレイボール。1塁側スタンドからゲームを見守る2人。観衆が試合の行方に注目するなか、2人の目が追うのはひたすら選手の足元。ゲーム中にできるグラウンドの傷跡を1つ1つ厳しくチェックしながら、万一のアクシデントに備える。

野球をよりおもしろくさせていると思うんです。それで、地元チームのレベルアップにつながったら一番うれし。



「野球を楽しむ人々にとつて、私たちはあくまで脇役です」と。  
この思いは、少なからず「裏方」

「野球を楽しましむ人々にとつて、私たちはあくまで脇役です」と。  
この思いは、少なからず「裏方」



機械のメンテナンスはお手のもの



1塁側スタンドから観戦するようす

「芝の色付きが悪くて困つとんよ。ほれ、あのへん。こつちも」  
「随分、色付いてきましたね」  
外野で芝生の手入れをしていた穂田さんに話しかけると、意外な答えが返ってきた。  
「芝の色付きが悪くて困つとんよ。ほれ、あのへん。こつちも」  
「随分、色付いてきましたね」  
外野で芝生の手入れをしていた穂田さんに話しかけると、意外な答えが返ってきた。



1 徳島市球技場を視察するようす  
2 根腐れを起こした芝 3 冬場も熊手を使ってサッチを除去している



「春先の寒さと雨の影響で根腐れを起こしとんよ。葉っぱに勢いがいいだろ」  
それは以前から抱えていた悩みでもあった。原因は、芝生の下の植え床にあるという。  
通常、芝生の植え床には砂を使用する。それまでは比較的粒の小さい砂を敷いていたが、度重なる雨と踏み圧で

目詰まりを起こし、水はけが悪くなっていたのだ。「植え床をほぐすなどしてそれなりの対策はしてきたつもりだが、水はけがよく、根をしつかりと張れるグラウンドはつくれないものか」  
ヒントになったのは、芝生管理を専門とするグラウンドキーパーからのアドバイスだった。  
雨季が近づくと5月16日、2人は市職員

**球春到来！  
思いっきり野球を楽しもう**

冬の日差しを柔らかく受け止めた黄金色の芝生。周囲をコンパスで描いたように美しくカットされ、内野の整備も完了の時を迎えていた。

限られた予算の中で最大の効果を生み出すのもキーパーとしての重要な役割の一つ。ただ、粒の大きな砂は水はけや空気の流れがいい反面、乾燥しやすく常に水をまかななければいけない。

肥料を与えることも含め、手間は今まで以上にかかる。それでも「少しでもいい状態でプレーをしてもらいたい」という思いが強かった。みんなで話し合っ出て出した結論は、こうだった。  
「やれるだけやってみよう」  
それからというもの、最良の目砂を求めて石材店に日参する。  
「これから徐々に砂を入れ替えて生育状況を見守ります。以前のように元気な芝によみがえってくれたらええんやけどな」と、期待を込める穂田さん。試行錯誤の日々はこれからも続きそう



4 エアコア機による土抜き 5 トップドレジャーで芝生に砂を補充する 6 新しく購入した粒の大きい砂

と呼ばれる人たちに共通したことなのかもしれない。審判であれ、スコアラーであれ、皆、選手がプレーするための脇役なのだ。果たしてそうだろうか。彼らのような「仕事師」たちが存在しなければ、1試合、いや1イニングですら、野球というものは成立しない。その意味において、山田さんたちは裏方などでない。裏方どころか、選手と同等に欠くべからざる野球という世界の一角。どのような立場であれ、志を失うことなく自らの歩を進めているなら、山田さんたちもまた、まぎれない主役なのではないか。  
球春到来、グラウンドキーパーの思いが宿ったこのグラウンドで、思いっきり野球を楽しみたい。感謝の気持ちを持つて。



**JAアグリあなんスタジアム**  
阿南市桑野町桑野谷 34 番地 1 南部健康運動公園内  
☎ 0884-26-1885 FAX0884-26-1886  
開館時間 4月～10月 8:30～22:00  
11月～3月 8:30～17:00  
休園日 毎週火曜日（火曜日が祝日の場合は翌日）  
年末年始